

在日外国人の対人関係における不安と影響する諸要因についての研究 —「滞在期間」「出身地域」「差別経験」に着目して—

張 氷穎

要旨

本稿では、データへの二次分析を通して、対人関係における在日外国人の不安への「滞在期間」「出身地域」「差別経験」の影響を示唆した。また、「滞在期間」によって変わらない不安点についても見出した。その結果、1. アジア系外国人は他の国や地域の外国人より不安を感じる点が多い；2. 差別的な扱いを多く経験する外国人ほど不安を感じる点が多い；3. 「カルチャーショック」に相当する問題点は、滞在期間が長くなると自然に改善されるが、「日本人が近づいてこない」などの問題点は、滞在期間によって変わらない傾向にある；4. 「差別的な雰囲気を感じる」という問題点は、滞在期間によって一時的に改善されるが、居住年数が 10 年以上になると、また感じてくる可能性が高い、といった結論が得られた。本稿は、「長期滞在が適応に繋がる」「対人関係上の適応は長期滞在の影響を受けない」といった先行研究の成果を踏まえつつ、重回帰分析・二項ロジスティック回帰分析を通し、対人関係において具体的にどのような点在日外国人の不適応の改善が難しいのかを詳しく検討した。

キーワード：日本語教育，異文化適応，異文化接触，量的分析

1. イントロダクション

1.1 はじめに

世界のグローバル化に伴い、留学や就職のために海外に出ることが珍しくない。自分の育った文化環境を離れて異文化環境に移行するのは、心理的なストレスをもたらすことが多く、人類学者 Oberg (1960) はそのような状態を「カルチャーショック」と名付けている。ただし、混乱は数年にわたって続くとは限らず、人は様々な困難を克服して成長し、母国と異なる文化環境に適応していくことも知られている。異文化適応研究においては、Lysgaard (1955) の U 型カーブ説のように、適応の時間的経過をいくつかの段階に分類する研究が多く、異文化での滞在期間が長くなるにつれ、その文化に適応していくことができるとまとめられている。しかし、適応に要する時間は個人差が大きく、日本への適応の場合、「留学 3～4 年の時点でも適応の回復がみられない場合がある」

と高井 (1989:145) が指摘している。特に対人関係上の適応では、「滞在期間とは無関係」という U 型カーブ説を支持しない結論も多く (上原 1988 など)、「アジア系外国人が日本人からの差別で対日イメージが悪化したり、人間関係で悩まされたりする」(岩男・萩原 1991 など) という指摘もある。本稿は、「在日外国人が日本人との接触における不安」を切り口とし、滞在期間、出身地域、差別経験からの影響を検証しつつ、滞在期間によって影響されない「不適応」の問題点を見出すことを目指している。

1.2 先行研究

異文化適応研究において、Lysgaard (1955) の「U 型カーブ」説と Gullahorn&Gullahorn (1963) の「W 型カーブ」説がよく知られている。前者は「初期の表面的適応」からいったん落ち込んでまた回復するというプロセスで、後者は数年間の異文化滞在の後に帰国した時の体験を加えたうえ、U 型を延長したものである。稲村 (1980) は海外に移住する日本人の適応過程を、時間的経過で「移住期」「不満期」「諦観期」「適応期」「望郷期」という 5 つの段階に分類し、途中で一足飛びに次の段階に行ったり、個人差によって各時期の長さが異なると指摘しているが、長期滞在によって適応期が迎えられるということが共通的な特徴となっている。

しかし、研究の発展につれ、完全に「U 型カーブ」説に従う事例が少なく、滞在期間の影響が適応の領域によって異なっていることが様々な研究によって証明されている。特に在日外国人の場合、対人関係上の適応は長期滞在の影響を受けないという結論も少なくない。上原 (1988) は、異文化適応を学習、情緒、言語、対人関係、文化、住居、経済という 7 領域に分け、長期滞在グループと短期滞在グループの適応度を比較した結果、長期滞在者は、言語、文化、住居・自然環境で短期滞在者より適応度が高いが、対人関係を含めたほかの領域では有意差が見出されなかった。佐野 (1990) は、在日留学生を対象に、4 場面での困難度を測定した結果、滞在期間が長いほど日常生活での困難度が軽減傾向を示しているが、正式場面、自己主張、友人関係の 3 場面においては長期滞在によって困難が軽減するといった傾向はみられなかった。佐々木・水野 (2000) は、上原 (1988) の尺度を参照し、学習、健康、文化、対人関係、住居・経済という 5 領域について外国人研修生を対象に縦断的分析を行った。学習、日本文化、住居・経済の 3 領域において、滞在期間が長くなるにつれ、適応得点が高くなることが判明したが、対人関係と健康においては滞在期間による影響が見られなかった。さらに興味深いことに、謝 (2014) は「対人関係・コミュニケーション」について、短期滞在の学生より長期滞在の学生のほうがストレスを感じやすいという結論を出した。先行研究を見る限り、対人関係への滞在期間の影響が不確定であり、各研究の結果が必ずしも一致しているとは限らない。従来の異文化適応研究をレビューした高井 (1989) では、「適応の第一の障害は明らかに対人関係である」と述べ、20 年以上が経って在日外国人の異文化適応研

究を再レビューした譚ほか（2011）も、「留学生の困難な問題として対人関係面の問題が多く取り上げられている」とまとめている。しかし、多くの研究は「対人関係での適応は滞在期間とは無関係」と同じような結論に至っている。概して、「どのような不適応が時間経過によって解消されないのか」が詳しく考察されていない。

また、対人関係上の適応の場合、滞在期間のほか、出身地域と差別経験も関連要因として挙げられる。岩男・萩原（1991）の一連の研究によると、アジア系留学生は欧米系留学生より日本人の「親和性」を低く評価し、対人関係と直接に関わっている側面ほどアジア系留学生が不適応になりがちである。高井（1989）は在日留学生に関わる諸研究を比較し、アジア人学生は日本人からの差別的な態度で対人関係上の適応に悩まされている一方、欧米人学生は日本の教育体制及び日本人からの特別扱いに不満を抱いている、と分析した。田中（2000）は、異文化適応を4側面に分け、各側面に対する分散分析を行った結果、一般的適応¹⁾において東南アジア出身者は、西洋、中南米、韓国出身者より適応が悪く、親和型適応では中国、韓国出身者は、西洋と中南米、東南アジア出身者より適応が悪かったと指摘した。ここでさらに、「差別的な扱いを受けた経験が対人関係での適応に負の影響を与える」「アジア系外国人が欧米系外国人より対人関係の面で不安と感ずるところが多い」といった仮説を立て得るが、従来の研究ではそれに関する数量的な検証が少ない。

本稿は、先行研究の問題点に基づき、対人関係における在日外国人の不安に着目し、対人関係での適応への滞在期間の影響を再検証しつつ、滞在期間によって影響されない「不適応」の問題点を見出すことを目指している。そのうえ、出身地域と差別経験からの影響を考察しながら、在日外国人が日本人との接触においてどのような点で不安の解消に困難を抱えているのかを把握する。

1.3 リサーチ・クエスチョン

本稿は、在日外国人の対人関係における不安に焦点を当て、以下の4つのリサーチクエスチョンを取り上げる。

- ① 在日外国人が不安を感じる問題点の数は、長期滞在によって減少されるのか。
- ② 上記のような問題点のうち、滞在期間によって影響されないものはあるか。
- ③ 在日外国人が不安を感じる問題点の数と、その人の出身地域との間に関連はあるか。
- ④ 差別的な扱いの種類²⁾の経験数は在日外国人の不安に影響を及ぼすか。

以上、本稿は先行研究の結論を再検証すると同時に、「滞在期間」と相関しない在日外国人の「不適応」を見出し、さらに対人関係領域での適応と、出身地域や差別経験とは関連しているかどうかについて数量的な検証を行うことを目的としている。

1.4 仮説

「U型カーブ」説によると、異文化環境での滞在期間が長くなると、母国と滞在国の文化の違いを客観的にみることができ、滞在国にうまく溶け込める傾向がある。しかし、先行研究では「滞在期間と対人関係上の適応が無関係」「短期滞在者よりむしろ長期滞在者のほうが対人関係でストレスを感じやすい」といった結果もある。本稿は、「長期滞在が適応に繋がる」と「対人関係上の適応は長期滞在の影響を受けない」を両方とも支持するという立場に立つうえ、対人関係の領域においては、滞在期間によって影響される点と影響されない点があると考え、RQ①②について、以下の2つの仮説を立てる。

仮説 1. 滞在期間が長ければ長いほど、外国人が不安を感じる問題点の数には減少傾向が見られるだろう。

仮説 2. 上記のような問題点のうち、滞在期間によって影響されるものと影響されないものがあるだろう。

次に、出身地域と差別経験について、1.2節で取り上げた先行研究に基づき、RQ③④について、以下の2つの仮説を立てる。

仮説 3. 他国の外国人と比べて、アジア系外国人、特に東アジアの人のほうが不安を感じる点が多いだろう。

仮説 4. 差別的な扱いを多く経験すればするほど不安を感じる点が多いだろう。

「特に東アジアの人のほうが不安を感じる点が多い」と予測したのは、田中（2000）に指摘されたように、人間関係に関する親和型適応では中国、韓国出身者は東南アジア出身者より適応が悪いと考えたからである。村田（2006）は、過去の外国人イメージの実証研究を考察したところ、「アジア民族の中でも、朝鮮民族に対する態度がとくに否定的である」「この態度は長い期間をかけて徐々に改善してきたが、その歩みは遅い」と指摘している。尹（2016）によると、在日コリアン青年は「韓国・北朝鮮について否定的な話題」に遭遇する状況では、「関係悪化の不安」などの葛藤的な気持ちが生じる。一方、葛（2019）も、精神的健康、対日感情、対人関係、日本語力という4因子について中国人留学生と他国の留学生に分けてt検定を行ったところ、「中国人留学生がほかの留学生と比べて、対人関係により大きな問題を抱えている」と提示している。今まではアジア人をひとくくりにして分析する研究が多かったが、アジアにも出身国によって違いがあるため、さらに下位分類を行って分析したほうがより多様性が見られるだろう。

2. 方法

本稿では、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから個票データの提供を受けた「在留外国人に関する調査、2020」²を使用する。この調査データは、2020年3月27日～4月17日の間で日本に住む20歳以上在留外国人にインターネット調査したものであり、1037の有効回答がある。

本稿は、当調査票の「問 25 日本人との付き合いの中で感じる不安や問題点（複数選択）」における 7 つの問題点（表 1）を目的変数、「問 5 居住年数」「問 2 国籍・地域」「問 68 過去 5 年間に次の経験をしたことがあるか（複数選択）」を説明変数として統計解析ソフト R で分析を行う。本稿が使用した変数と分析にあたっての操作は以下のとおりである。

まず、「滞在期間」（表 2）のカテゴリーを「4 年未満」「4～9 年」「10 年以上」という 3 つに再編し、「出身地域」（表 3）のカテゴリーを RQ③の目的に照らし合わせて「東アジア」「その他アジア」「アジア以外の国や地域」という 3 つに再編する。次に、説明変数「差別的な扱いの種類経験数」は RQ④の目的に照らし合わせ、差別的な扱いを受けた経験（表 4）の選択個数を連続変数とする。

表 1 日本人との付き合いの中で感じる不安や問題点³

カテゴリー	選択数	回答比率
言葉が通じない	116	11.2%
付き合いきっかけが少ない	247	23.8%
日本の文化や習慣がわからない	172	16.6%
文化や習慣の違いを理解してもらえない	203	19.6%
共通の話題が少ない	287	27.7%
日本人の方が近づいてこない、避けられている	161	15.5%
差別的な雰囲気を感じる	92	8.9%
日本人との付き合いの中で不安はない	316	30.5%

表 2 滞在期間⁴

カテゴリー再編	居住年数	選択数	回答比率
4 年未満	1 年未満	9	0.9%
	1～3 年	272	26.2%
4～9 年	4～9 年	627	60.5%
10 年以上	10～19 年	113	10.9%
	20～29 年	13	1.3%
	30～39 年	2	0.2%
	40 年以上	1	0.1%

表 3 出身地域

カテゴリー再編	国籍・地域	選択数	回答比率
東アジア	中国（香港等を含む）	272	26.2%
	台湾	55	5.3%
	韓国・朝鮮	49	4.7%
その他アジア	フィリピン	117	11.3%
	ベトナム	183	17.6%

	ネパール	56	5.4%
	タイ	17	1.6%
	インドネシア	38	3.7%
	インド	15	1.4%
アジア以外の国や地域	アメリカ	40	3.9%
	イギリス	12	1.2%
	ブラジル	89	8.6%
	ペルー	3	0.3%
欠損値	その他	91	8.8%

表 4 差別的な扱いを受けた経験

カテゴリー	選択数	回答比率
職場や学校の人々が外国人に対する偏見を持っていて、人間関係がうまくいかなかった	253	24.4%
職場・学校で、外国人であることを理由にいじめを受けた	162	15.6%
名前が日本人風でないことによって嫌がらせを受けた	152	14.7%
日本語がうまく使えないことで嫌がらせを受けた	194	18.7%
知らない人からジロジロ見られた	459	44.3%
バスや電車、ショッピングセンターなどの公の場で自分を避けるようにされた	184	17.7%
近所の住民に受け入れてもらえなかった	94	9.1%
日本人に話しかけたが無視された	192	18.5%
日本人との交際・結婚に際し、外国人であることを理由に相手の親族から反対された	80	7.7%
日本人の家族や親族などから、自分の子どもに出身国（地域）の文化を教えるはいけないと言われた	60	5.8%
日本人の家族や親族などから、出身国（地域）やその文化について、侮辱されたり、からかわれたりした	44	4.2%
日本人の家族や親族などから、日本人風の名前を名乗るように促された	20	1.9%

RQ①③④を検証するため、本稿はまず、表 1 にある「言葉が通じない」「付き合うきっかけが少ない」「日本の文化や習慣がわからない」「文化や習慣の違いを理解してもらえない」「共通話題が少ない」「日本人の方が近づいてこない、避けられている」「差別的な雰囲気」という 7 つの問題点の選択個数を目的変数とし、「滞在期間」「出身地域」「差別的な扱いの種類を経験数」を説明変数とし、「性別」「年齢」「同居者の有無」「居住地」「月収」「就業形態」「在留資格」という 7 つの統制変数に、「出身地域」と「差別的な扱いの種類を経験数」の交互作用項を加え、重回帰分析を行う。RQ②の検証にあたって、本稿は不安を感じる問題点の数に有意な影響を示した変数を統制したうえ、各

問題点をカテゴリー変数とした二項ロジスティック回帰分析を行う。

3. 結果

3.1 記述統計

表 1 の回答比率を見てみると、「不安はない」を選択した割合は全体で 30.5%に過ぎない。7 割の外国人は日本人との付き合いで不安を感じていることが分かる。また、具体的な不安や問題点に関して、「共通の話題が少ない」が全体の 27.7%で一番多いものの、次には「付き合いきっかけが少ない」(23.8%)が続く。「文化や習慣の違いを理解してもらえない」(19.6%)「日本の文化や習慣がわからない」(16.6%)「言葉が通じない」(11.2%)「差別的な雰囲気を感じる」(8.9%)は、いずれも 1~2 割が不安を感じている。問題点の選択個数の記述統計を以下の表に示す。

表 5 不安を感じる問題点の選択個数の記述統計

変数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
不安を感じる問題点の選択個数	0	7	1.3	1.2

差別経験に関しては、表 4 に提示されていたように、半数近くの外国人が「知らない人からジロジロ見られた」経験があり、2 割以上の外国人が「職場や学校の人々が外国人に対する偏見を持っていて、人間関係がうまくいかなかった」経験がある。続いて「日本語がうまく使えないことで嫌がらせを受けた」「公の場で自分を避けるようにされた」「職場・学校で、外国人であることを理由にいじめを受けた」「名前が日本人風でないことによって嫌がらせを受けた」「日本人に話しかけたが無視された」を経験した外国人はいずれも 14%~20%いる。連続変数としての「差別的な扱いの種類経験数」に関する記述統計を、表 6 に示す。

表 6 差別的な扱いの選択個数の記述統計

変数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
差別的な扱いの選択個数	0	12	1.8	1.2

3.2 不安を感じる問題点の数への重回帰分析

この節では、性別、年齢、在留資格などの統制変数の影響を統制したうえで、滞在期間、出身地域と差別的な扱いの種類経験数から不安を感じる問題点への効果を重回帰分析によって確認し、RQ①③④を検証する。重回帰分析の結果を以下の表に示す(統制変数のデータなどは表 7 では略されている。表 8, 表 9, 表 10 も同様)。

表 7 重回帰分析の結果(「不安を感じる問題点の数」に対する諸要因の効果)

要因			偏回帰係数
(切片)			1.451***
滞在期間	(ref:4年未満)	4～9年	-0.194*
		10年以上	-0.263*
出身地域	(ref:東アジア)	その他アジア	-0.636***
		アジア以外の国や地域	-0.817***
差別的な扱いの種類の経験数			0.212***
その他アジア×差別的な扱いの種類の経験数			0.158*
アジア以外の国や地域×差別的な扱いの種類の経験数			0.031
adj. R2			0.188***

Ref:基準カテゴリー。* $<.05$, ** $<.01$, *** $<.001$.

まず、滞在期間に関しては、4～9年 (-0.194) と 10年以上 (-0.263) の係数がマイナスであり、かつ10年以上の係数のほうがより小さく、両方とも5%水準で有意であることから、滞在期間が長い人のほうが不安と感ずるところが少ないと考えられる(図1)。

次に、出身地域に関しては、すべての係数がマイナスで0.1%水準で有意であり、さらにアジア以外の国や地域の係数 (-0.817) がその他アジア (-0.636) より小さいことから、ほかの国や地域と比べて、アジア系外国人、特に東アジアの外国人(中国・台湾・韓国・朝鮮)のほうが不安を感じる点が多いと判断できる(図3)。また、「差別的な扱いの種類の経験数」の係数はプラスでかつ0.1%水準で有意であるため、外国人が差別的な扱いを多く経験することにつれ、日本人との付き合いで不安と感ずる点が多くなると判断できる(図2)。

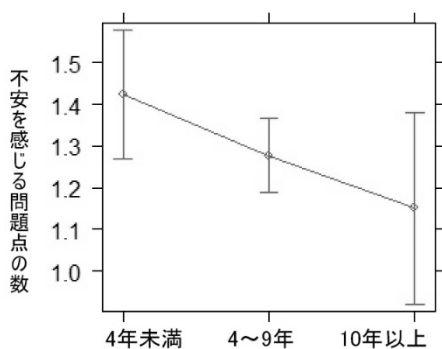


図1 滞在期間の効果図

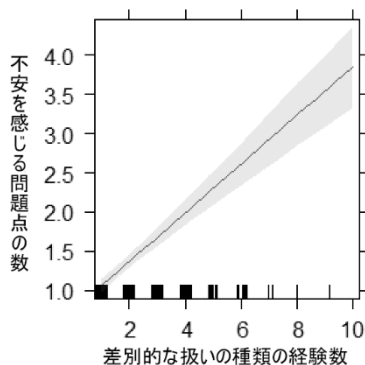


図2 差別な扱いの種類の経験数の効果図

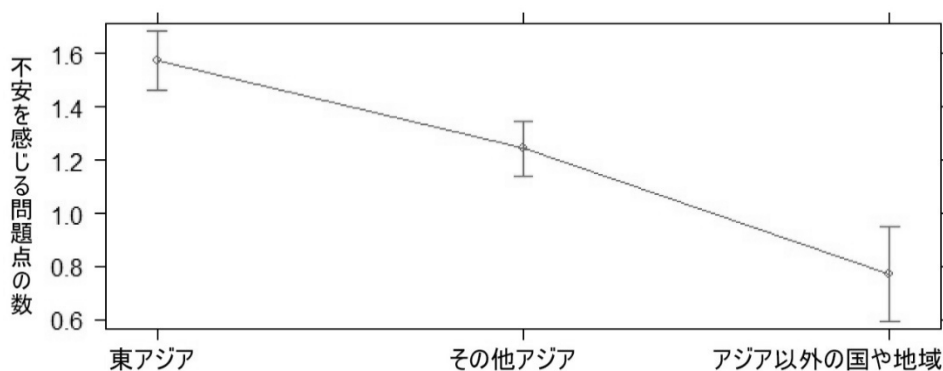


図3 出身地域の効果図

3.3 各不安点への二項ロジスティック回帰分析

この節では、3.2節で不安を感じる問題点の数に有意な影響を示した変数（「出身地域」「差別的な扱いの種類の経験数」「居住地」「月収」「出身地域×差別的な扱いの種類の経験数」）を統制したうえ、具体的な不安点を目的変数とし、滞在期間を説明変数とした二項ロジスティック回帰分析を行い、RQ②を検証する。「差別的な雰囲気を感じる」という問題点に関しては、「差別的な扱いの種類の経験数」の影響が大きいという可能性もあると考え、上述の統制変数のほか、滞在期間と差別的な扱いの種類の経験数の交互作用項も統制変数として加えた。結果は表8の通りである。

表8 ロジスティック回帰分析の結果（各問題点に対する滞在期間の効果）

不安を感じる具体的な問題点	滞在期間の偏回帰係数 (ref:4年未満)	
	4～9年	10年以上
言葉が通じない	-0.441†	-1.090*
つき合うきっかけが少ない・ない	-0.098	0.111
日本の文化や習慣がわからない	-0.289	-0.923*
文化や習慣の違いを理解してもらえない	-0.465*	-0.982*
共通の話題が少ない・ない	-0.023	0.177
日本人の方が近づいて来ない、避けられている	0.338	0.345
差別的な雰囲気を感じる	-1.105*	-0.147

Ref:基準カテゴリー。†<.1,*<.05.

表 8 で示されているように、「言葉が通じない」「日本の文化や習慣がわからない」「文化や習慣の違いを理解してもらえない」に関しては、滞在期間に関するすべての係数がマイナスである。また、4～9年と比べて10年以上の係数のほうがより低く、かつ5%水準で有意であることから、それらの問題点と滞在期間との間に負の相関があることが分かる。要するに、日本に長く滞在すればするほど、それらの不安が解消される傾向を示している（図4）。

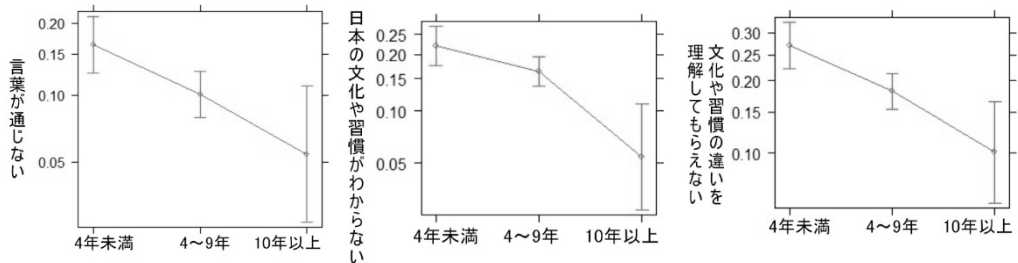


図4 滞在期間によって改善される問題点

「つき合うきっかけが少ない・ない」「共通の話題が少ない・ない」「日本人の方が近づいて来ない、避けられている」といった問題点について、滞在期間に関するすべての係数が有意でない。それらの点に関しては、滞在期間に関わらず一定の不安が存在すると判断できる。その中に特に、「つき合うきっかけが少ない・ない」「共通の話題が少ない・ない」という2つの問題点の係数が0に近いため、母集団では「短期滞在」と「長期滞在」の差はないという可能性が高い（図5）。

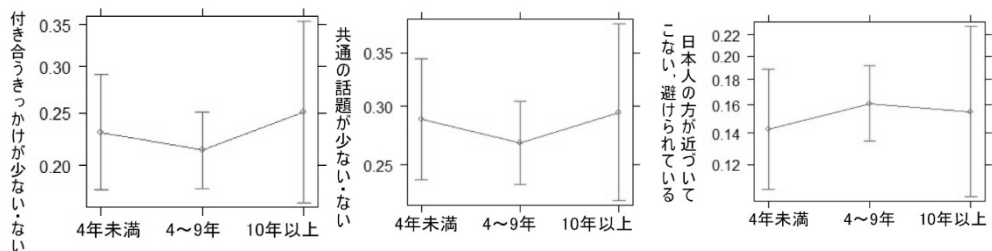


図5 滞在期間に関わらず一定の不安が存在する点

「差別的な雰囲気を感じる」に関しては、4～9年の係数がマイナス (-1.105) でかつ5%水準で有意であるため、4～9年の外国人より4年未満の外国人のほうが差別的な雰囲気を感じやすいと考えられる。また、10年以上の係数が有意ではなく、かつ4～9年より0に近くなっていることから、10年以上と4年未満の間の差がそれほど大きくないと考えられる。よって、滞在期間が4年未満から4～9年になると、差別的な雰囲気を感じなくなるが、4～9年から10年以上になるとまた差別的な雰囲気を感じてくるとい

うことが示唆される（図6）。

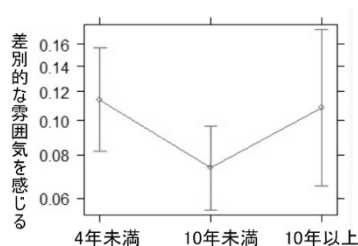


図6 一時的に軽減されるがその後再び不安を感じる問題点

4. 考察

この章では、分析結果に基づいて4つのリサーチ・クエスチョンに回答しながら、なぜそのような分析結果が得られたのかを検討する。

4.1 滞在期間の影響への考察

RQ①への答えとして、母集団の状況を考えると、滞在期間が長くなることにつれ在日外国人が不安を感じる点も少なくなり、仮説1が検証できたといえる。また、RQ②を考察したところ、外国人が不安を感じる点のうち、仮説2が予測した通り、滞在期間によって影響されるものと影響されないものがある。日本にいる時間が長ければ長いほど不安を感じなくなる問題点として、「言葉が通じない」「日本の文化や習慣がわからない」「文化や習慣の違いを理解してもらえない」という3つがあげられる。「言葉が通じない」については、外国人が日本人とコミュニケーションしなければいけないという環境に置かれることにより、たとえ言語学習が苦手な人でも、日本への滞在期間が長くなるにつれ、自然習得が進むと推測できる。残りの2つの問題点はまさに、母国と異なる文化に触れた際に受けた「カルチャーショック」である。Adler (1975)によると、異文化滞者が「異文化との接触」を経て「自己崩壊」に入る段階において、両文化の相違点に気づき、自文化を失うことを恐れることが多く、その結果混乱や喪失感を感じたりすることになる。ただし、滞在時間が長くなり、日本文化規範を習得していくことにつれ、次の「自己再統合」の段階を経て自尊心の立直しに向かい、少しずつ異文化を理解していき、さらに文化的な差異と共通点を共感をもって受け入れる「自律」の段階に至る。そこで「U型カーブ」説で説明されたように、様々な状況において自己成長することにつれ、新環境への適応が進み、再び満足感を感じる心理状態に戻る。

また、滞在期間によって変わらない「つき合うきっかけが少ない・ない」「共通の話題が少ない・ない」「日本人の方が近づいて来ない、避けられている」という3つの問題点はまわりの状況や環境に関係が深く、自身の知識やスキルの習得などによって変えにくいと考えられ、したがって滞在期間によって影響されない可能性が高い。それらの

問題点に関しては、日本社会の受容環境と日本人側の受容度も大きく関わってくると考えられる。この3つの問題点について不安を感じたことのある在日中国人にインタビューしたところ、以下の事例が得られた。

「普通はアニメだったりゲームだったり、たまに研究の話もしてるんですけど、それ以外の話題があまりないんですね。(中略) その時は『向こうはあまり中国人と話したくないのではないか』と思ったんです。」(Aさん、滞日3年、「共通の話題が少ない・ない」について)

「日本人とはそんなに話題が多くなくて、どうして日本に来たんですかみたいな簡単なトピックに止まっています。」(Bさん、滞日5年、「共通の話題が少ない・ない」について)

「友達になったり、少なくとも一緒に遊んだり、そういうことになるきっかけはほとんどないんですかね。(中略) なので、日本の方との付き合いは全部自分でやるしかないんです。(中略) ただ、中国人と比べると、誘いにくい、大体、やはり。」(Cさん、滞日11年、「つき合うきっかけが少ない・ない」について)

「特に用事が無ければ日本人は近づいて来ないが、意図的に避けられているわけではないと思う。どっちかというと『外国人だし用事が無ければ関わりたくない』というような感覚が近いですね。」(Cさん、滞日11年、「日本人の方が近づいて来ない、避けられている」について)

3人の解釈から見ると、この3つの問題点に共通していることは、日本人と距離感を感じていることである。田中(2000)は、アジア人と欧米人を含めた24人の在日留学生に「対人行動における困難」を尋ねたところ、「外国人の回避」(外国人が近寄ると会話をやめるなど)、「日本人の外国人との付き合いの不慣れ」(外国人は変に厚遇されるなど)、「英国・米国への過大な注目」(外国人が英語練習相手、白人以外が軽視されているなど)などの項目について言及があった。経済の発展やグローバル化につれ、異文化接触の機会が増えたが、日本人にとっての外国人は相変わらず「好奇心の対象」「差別の対象」「同情の対象」「羨望の対象」に過ぎず、「外の人」として扱われている(小原・山崎 1991:111)。したがって、外国人がどれほど日本に長く滞在しても、日本人との距離感を感じており、その不安が滞在期間によって解消されないのであろう。

最後に、「差別的な雰囲気を感じる」という点は、言語や文化の習得を通して改善できるものではなく、自分の力で変えにくい「まわりの環境や状況」でもない、外国人の主観的な読み取りである。同じような経験をして、そこにこうした不安を感じるかどうかは人によって異なる場合がある。この問題点について滞日3年のAさんと滞日11年のCさんにそれぞれ尋ねたところ、Aさんは「ゼミで指導教員の先生から意地悪な質

問をされたこと」を差別的な雰囲気だと認識しており、滞日 11 年の C さんは「中国人という理由で上司にパワハラされた経験」について言及している。確かに C さんの経験は差別といえるが、A さんの場合はそうとは限らない。ここで 2 つの仮説を挙げる：①滞在期間が「4 年未満」の外国人については、日本人との接触経験の不足により、「日本人が近づいて来ない」「文化の違いを理解してもらえない」といったまわりの状況を「差別的な雰囲気」と解釈してしまうのだが、時間が経過し、接触経験が深まるにつれそうした解釈は減少していくという仮説、②一方で滞在 10 年以上になると、実際に差別的な扱いを受けた経験が重なっていくため、「差別的な雰囲気」に対する不安はかえって増大していく、という仮説である。

4.2 差別経験と出身地域の影響への考察

RQ④への答えとしては、外国人が差別的な扱いを多く経験することにつれ、日本人との付き合いで不安と感じる点が多くなるということが判明し、仮説 4 の主張が検証されたといえる。ここでさらに二項ロジスティック回帰分析の結果に基づき、差別経験から各問題点への影響を考察すると、以下の結果が得られた。

表 9 各問題点に対する差別的な扱いの種類の種類経験数の効果

不安を感じる具体的な問題点	差別的な扱いの種類の種類経験数の偏回帰係数
言葉が通じない	-0.036
つき合うきっかけが少ない・ない	0.026
日本の文化や習慣がわからない	0.027
文化や習慣の違いを理解してもらえない	0.418***
共通の話題が少ない・ない	-0.166
日本人の方が近づいて来ない、避けられている	0.262*
差別的な雰囲気を感じる	0.387*

*<.05, ***<.001.

表 9 に示されているように、「差別的な扱いの種類の種類経験数」が「言葉が通じない」「つき合うきっかけが少ない・ない」「日本の文化や習慣がわからない」「共通の話題が少ない・ない」といった問題点に対しては効果がなかったが、「文化や習慣の違いを理解してもらえない」「日本人の方が近づいて来ない、避けられている」「差別的な雰囲気を感じる」の係数がプラスで有意になっている。それらの問題点の共通点としては、不安を感じた原因が日本人側にあると解釈できる。要するに、日本人に差別されることで、日本人にネガティブなイメージを抱きやすく、「日本人側の問題」をさらに意識して不

不安になり、そこで不安と感じる問題点は増加傾向がある、という解釈である。

RQ③への答えとしては、ほかの国や地域と比べて、アジア系外国人、特に東アジアの外国人のほうが不安を感じる点が多いと判断でき、仮説3の主張も検証されたといえる。先述した高井（1989:145）は、「日本人はアジア人には差別的な態度を示し、この地域の留学生は対人関係上の適応に悩まされている」と指摘しているが、目的変数を「差別的な扱いの種類の数」、説明変数を「出身地域」として回帰分析を行ったところ、有意な結果を見出せなかった。ここでさらに各具体的な差別経験を目的変数とし、出身地域を説明変数とし、滞在期間や月収などを統制したうえで二項ロジスティック回帰分析を行った。有意になっている項目を以下の表に示す。

表 10 具体的な差別的な経験における出身地域間の比較

具体的な差別経験	出身地域の偏回帰係数 (Ref:東アジア)	
	その他ア ジア	アジア以外 の国や地域
職場や学校の人々が外国人に対する偏見を持っていて、人間関係がうまくいかなかった	-0.582**	-1.140***
職場・学校で、外国人であることを理由にいじめを受けた	0.192	-0.863*
名前が日本人風でないことによって嫌がらせを受けた	-0.637**	-1.438***
日本語がうまく使えないことで嫌がらせを受けた	0.352†	-0.944**
知らない人からジロジロ見られた	1.037***	2.551***
バスや電車、ショッピングセンターなどの公の場で自分を避けるようにされた	-0.111	0.589*

Ref:基準カテゴリー。†<.1, *<.05, ***<.001.

「日本人との交際・結婚に際し、外国人であることを理由に相手の親族から反対された」「日本人に話しかけたが無視された」といった差別経験は有意になっていないため表には示されていないが、アジア系外国人と欧米系外国人の間には差がない可能性が高い。「職場や学校の人々が外国人に対する偏見を持っていて、人間関係がうまくいかなかった」「職場・学校で、外国人であることを理由にいじめを受けた」「名前が日本人風でないことによって嫌がらせを受けた」「日本語がうまく使えないことで嫌がらせを受けた」という4つの経験について、「アジア以外の国や地域」の係数がすべてマイナスであり、かつ「その他アジア」よりも有意性が高い。したがって、アジア系外国人はほかの外国人よりそのような差別的な扱いを多く経験していることが分かる。ただし、「知らない人からジロジロ見られた」「バスや電車、ショッピングセンターなどの公の場

で自分を避けるようにされた」という2つの経験については、逆に「アジア以外の国や地域」のほうが経験した人が多い。要するに、どの地域の外国人でも日本人から「外の人」として扱われ、いろいろ差別的な扱いを受けているが、経験しやすい差別的な扱いの種類が出身地域によって異なっている。安達（2006）は日本人の異文化受容態度について調査を実施した結果、日本語を話そうとしない外国人に対して、中国人よりアメリカ人のほうが受け入れられやすいと指摘した。また、安達の質的調査では、「白人の外国人で、特に日本語を話す人だと、つい親しみを感じて、気を許してしまう」「ある程度の社会的立場にあっても、東南アジア出身の外国人には、やや見下げた対応をする人が多い」という、肌の色で相手を判断する事例も見られた。アジア系外国人の場合は、見た目が日本人と似ており、文化的距離も近いため、あまり「好奇心の対象」として見られていない。そのため、日本人がわざわざ遠ざけるといった「差別」は比較的少ない。しかし、村田（2006）や安達（2006）にも指摘されたように、アジア系外国人は負のステレオタイプのイメージを持たれている場合が多い。例えば、学校や職場において日本人らしく行動することが期待されている、日本の文化規範や言語に成熟していないと不満にさらされる、といった具合である。したがって、アジア系外国人が特に「学校や職場」というようなパブリックな人間関係において、日本人に否定されたり軽蔑されたりすることが多く、日本人との付き合いで不安と感じる点も多いと考えられる。

5. おわりに

本稿は、データへの二次分析を通し、在日外国人の対人関係における不安と滞在期間、差別経験、出身地域の影響を検討した。本稿は、分析結果に基づき、1. 滞在期間によって解消されない問題点は周りの環境や日本人側の受容態度が影響を及ぼしている；2. 外国人が感じている「差別的な雰囲気」の内容は、日本での滞在期間の長短により異なる；3. 差別経験から対人関係上の適応への負の影響は日本人に対するイメージの変化で説明できる；4. 外国人が経験しやすい差別的な扱いの種類は、外国人の出身地域により異なる、と解釈しているが、さらに検証が必要である。今の段階でいえることは、対人関係面の不安の改善は、時間をかけて積極的にカルチャーショックに向き合う「個人要因」と、異文化側の「環境要因」（社会の受け入れ体制、日本人の態度など）両方が大きく関わっていることである。その中に外国人の中での「差別」の捉え方が大きな課題の一つであり、たとえ同じような経験をされたとしても、それを「差別的な雰囲気」として捉える人も捉えない人もいるはずである。今後は、滞在期間の異なる在日外国人、特に対人関係の面で不安を感じる人が多い東アジア外国人を対象にインタビューを行い、差別経験から適応への影響や「差別」の捉え方をさらに詳しく検討しつつ、本稿で得られた結果をもたらした原因を探ることを課題にしたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、指導教官として終始多大なご指導を賜った、東京大学大学院総合文化研究科の宇佐美洋先生に深く感謝申し上げます。

註

- ¹ 田中（2000）は、ストレスや孤独感などに関わる適応の側面を「一般的適応」と呼び、対人志向性や人間関係などに関する適応の側面を「親和型適応」と呼ぶ。
- ² 本稿の二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから「在留外国人に関する調査、2020（寄託者：サーベイリサーチセンター）」の個票データの提供を受けた。
- ³ 問25には、表1の項目以外、「近所に日本人が住んでいない」「日本人と付き合う必要がない」「その他」という3つの選択肢もある。これらの選択肢は本稿の分析では除外している。「日本人と付き合う必要がない」と「その他」はともに回答比率が1%と少ないこと、「近所に日本人が住んでいない」は人間関係と直接的な関係がないことが、除外に至った理由である。
- ⁴ 問5には、「1年未満」「1～3年」「4～9年」「10～19年」「20～29年」「30～39年」「40年以上」という7つの選択肢があるが、「20～29年」「40年以上」「1年未満」はサンプルが不十分であるため、「1年未満」を「1～3年」と合わせて「4年未満」として統合し、「20～29年」「40年以上」を「10～19年」と合わせて「10年以上」として統合した。「4～9年」は4年以上10年未満を意味している。

参考文献

- Adler, P. S. (1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15(4), 13–23.
- 安達理恵（2006）「日本人の異文化受容態度に関する実証的事例研究—異文化理解教育の方向性を考察する異文化間コミュニケーション研究—」, 名古屋大学大学院国際開発研究科博士論文.
- Gullahorn, J. T., & Gullahorn, J. E. (1963). An extension of the U-curve hypothesis. *Journal of Social Issues*, 19(3), 33–47.
- 稲村博（1980）『日本人の海外不適應』, 日本放送出版協会.
- 岩男寿美子・萩原滋（1991）『日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析—』, 勁草書房.
- 尹成秀（2016）「在日コリアン青年の対人関係における体験—グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた在日コリアン青年の語りの分析—」, 『教育心理学研究』, 64(4), 492–504.
- 葛水綺（2019）『中国人留学生・研修生の異文化適応』, 溪水社.
- 小原裕子・山崎喜比古（1991）「外国人に対する受容度及びその関連要因—日本人女子大学生の調査から—」, 『年報社会学論集』, 4, 105–116.
- Lysgaard, S. (1955). Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States.

International Social Science Bulletin, 7, 45–51.

- 村田光二 (2006) 「外国人イメージの構造—調査データに基づく考察—」, 森田敏己 (編) 『視覚表象と集合的記憶—歴史・現在・戦争』, 旬報社, 203–233.
- Oberg, K. (1960). Cultural shock: Adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*, 7, 177–182.
- 佐々木ひとみ・水野治久 (2000) 「外国人研修生の異文化適応に関する縦断的分析」, 『日本国際センター紀要』, 10, 1–16.
- 佐野秀樹 (1990) 「異文化社会への適応困難度に関する研究—社会場面による分析—」, 『行動療法研究』, 16, 37–44.
- 謝延瓊 (2014) 「日本語学校における中国人留学生の異文化ストレスと無気力感に関する研究」, 『九州大学心理学研究』, 15, 53–61.
- 高井次郎 (1989) 「在日外国人留学生の適応研究の総括」, 『名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科』, 36, 139–147.
- 田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』, ナカニシヤ出版.
- 譚紅艷・渡邊勉・今野裕之 (2011) 「在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望」, 『目白大学心理学研究』, 7, 95–114.
- 上原麻子 (1988) 「留学生の異文化適応」, 広島大学教育学部日本語教育学科・留学生日本語教育 (編) 『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』, 111–124.